日本社会における異文化理解：留学生の視点

——国際交流　広島大学短期交換留学プログラム留学生日本語スピーチ発表会「広島大学留学生から見た日本」を開催して——

恒　松　直　美

はじめに

本稿では、広島大学短期交換留学プログラム（HUSA）の国際交流イベントの一環として開催した日本語スピーチ発表会に基づき、留学生が日本・日本社会をどう捉えているかについて異文化理解の視点から考察してみたい。この日本語スピーチ発表会は広島県呉市吉浦公民館にて、国際交流「広島大学留学生から見た日本」という題目で行った。留学生が一年間日本で生活して何を感じ[1]、日本人及び日本人社会と自国の文化との相違をどう捉え、解釈したかについて考察することは、今後、国際交流・国際理解をどう進めていけばよいかを示唆する手がかりにもなる。また、地域社会と連携した国際化・国際交流が叫ばれる中、地域社会と協力して国際交流イベントを開催するにあたっての問題点、今後の課題についても言及したい。

これまで留学生の異文化適応に関して様々な研究がなされてきており、留学生の日本での文化適応に関しては、多様な方向から研究が進められている。例えば、大学・地域の国際化、留学生の支援体制、国による教授方法の相違、留学生と日本人との交流、留学生と日本人の対人関係問題、異文化間カウンセリング、滞在期間にともなう留学生の日本留学の評価の変容などである。さらに留学生だけでなく、日本人学生についても、留学生とのコミュニケーションにおいて生じる問題などについて研究が進められている。本稿で取り上げるHUSA留学生の日本語スピーチには、留学生が1年の留学を通じて感じた日本人・日本社会への率直な感想が述べられており、留学生が日本留学において直面する問題への理解を深め、異文化適応を支援し、国際理解を進めていく上で大変参考になると思われる。

開催までの経緯

このスピーチ発表会は、短期交換留学プログラムコーディネーターである私が、広島県呉市吉浦町にある吉浦公民館と交渉し、協力をお願いし、留学生日本語スピーチと国際交流という形で、2003年7月に呉市吉浦公民館主催で開催したものである。短期交換留学プログラムの一環としてこのスピーチ発表会を開催した目的は、日本で生活する留学生と地

域社会の方々との真のコミュニケーションの場を持ち、留学生が日本で暮らして感じた正直な気持ちを地域の人達に披露し、意見交換することであった。単なる日本語スピーチの発表に終始せず、文化的相違や生活習慣の違いについて、留学生が肌で感じたことを率直に地域の皆さんに伝え、気軽に意見交換できる場にすることを目指した。日本語スピーチを発表した留学生は6名であるが、約20名の短期交換留学プログラム留学生が聴衆として参加し、友人たちに見守られながら、なごやかな温かい雰囲気の中での開催となった。地域の方々の参加数は約百名であった。

日本語スピーチと意見交換会

日本社会と日本人に関して留学生のかなり率直な意見と感想に、町の方々も熱心に聞き入り、どよめきや笑いが時々わいた。問題を考察しやすくするため、六人のスピーチの内容を項目別に分類してみた。まず、日本について肯定的にとらえている事項から考察し、日本人とのコミュニケーションの問題・文化的相違、日本の教育、留学生と地域の人々との意見交換を分析してみたい。項目別に六人の留学生のスピーチからの抜粋を列挙し、その項目について考察してみた。

日本について肯定的に捉えている事[2]

＜日本人の気質＞

- 日本人は純粋で大変優しい。広島から鹿児島までヒッチハイクした時、喜んで乗せてくれて、しかも食べ物をくれようとしたり、逆方向に何キロでも連れて行ってくれたりする人は少なくなかった。
- 日本の高校に留学した時、カバンをバス停に置き忘れたが、次の日そのまま置いてあったことに感動した。
- 日本は安全で、日本人は、仕事熱心である。日本人は、成功を勝ち取るために努力を怠らないし、プロ精神に満ちている。電車が遅れることはまずない。どの店でも商品をとてもきれいに陳列している。サービスはとても充実している。どの店員もとても親切に応対してくれる。日本では、お客様は神様なのだ。フランスでは、お客様は王様だ。少し落ち込んだ時、お店に行くと店員さんが親切にしてくれるのでとても元気付けられる。私にとって、お店に行くことは最高のセラピーなのだ。道で会う商店街の人もとても親切だ。ある日、おばあさんに広島駅までの道を聞いていた時、私が最後の電車に乗り遅れそうなのを知ると、一緒に走ってくれた。彼らは、最善を尽くしてくれる。
- 日本人の家庭でホームステイをして、日本人の優しさを切実に感じた。寮で寂しく日本のお正月を送るかもしれないと、去年のお正月に日本人の友人の家へ招待された。日本

人の友人のおかげで、日本のお正月の食べ物も食べたし、一緒に神社へも行ってみる機会ができた。また、友人のお母さんから浴衣をプレゼントしてもらった。自分の浴衣を持つことなどは考えもしなかったことだ。

- 韓国・アメリカ・日本と住んでみることができた。国それぞれの文化、言語、習慣は異なるが、私が経験できた国には皆心の温かい人がたくさんいた。国籍は違うが、皆友達になるとコミュニケーションできる。日本に来て経験と知識を広げることができた。

＜安全性・日本文化・食べ物・日本的特徴についての事項＞

- 食べ物はおいしくて、健康的でユニークだ。
- 安全な国で、3年間で一回も怖いと感じたことがない。
- 電化製品が大好きな私みたいな人にはデオデオは天国だ。
- オーストラリアはとても新しい国なので、日本の長い歴史、伝統的な文化について勉強することはとてもおもしろい。
- 東大寺などのすばらしいお寺に感動した。
- 温泉は最高だ。
- 花火はオーストラリアで禁止されているので、夏の花火が上がる空を見ると嬉しくなる。
- 新幹線が時間ピッタリに来ることはすばらしい。
- 日本女性の着物姿の美しさと優雅さは日本以外で見たことがない。
- オーストラリアにはあまり自動販売機はない。でも、日本には自動販売機がたくさんある。凍えるような寒い日に飲む暖かい缶コーヒーの味は格別だ。
- 私が日本を離れて恋しくなるのは、食べ物では、刺身、寿司、ラーメン、温泉、波の香り、おじさんが郊外でゴルフの練習をしている風景、ホームで電車が到着する時に聞こえるメロディー、カメラ自動現像機プリクラと、もちろん言葉と日本人の顔である。

日本人とのコミュニケーションの問題・文化的相違

＜日本人学生との交流：礼儀・ヒエラルキー・グループ意識の差＞

- 私にとって仕事以外の場所でも日本人は、極端に礼儀正しいと思う。彼らの礼儀正しさは、私にはとても冷淡なものに感じられる。日本人の友達を作るのはとても難しいと感じる。だから、日本人はもっと心を開いて、私との間にそんなに距離を作らないで欲しいなと思う。私には日本における人と人のより深いコミュニケーションはとても複雑に思える。特に日本人とより仲良くなろうとする時そのように感じる。実際、日本でのもっと大きな問題は日本人とコミュニケーションをとることである。
- 最初私は、日本人が何を考えているのかよく分からずに、日本人との間に距離を感じていた。もちろん私の話をとても丁寧に、そして真剣に聞いてくれる。しかし、日本人は

自分の意見を示さないし、自分の意見を身振りで表すことはあまりない。彼らはただうなずくだけである。彼らは、私の話を聞くだけ聞いて去っていく。しかし私にとって仕事以外の礼儀正しさは極端すぎると思う。また、私にとってそのような態度は、冷淡な雰囲気に感じられる。

- 友達を作りたいなら、グループの視点は、日本人にとって十分に簡単なことである。外国人にとってはとても難しいことである。通常、時間は与えてくれるが、その中には入れてくれない。少なくとも、私の場合は、そのグループの人達は、大学卒業後も続くそのヒエラルキーを使う。
- 私の国にも階級は存在する。でも仕事が終わればもう関係ない。自由なのだ。私の国の文化が私の中に深く根付いていると考えると、ある日本人が先輩に呼ばれたからといって先に約束をしていた私との約束を破ったことに怒ることが理解できるであろう。少なくとも彼が少しでも説明をしてくれていたら、もっと理解が示せたと思う。最初は私が日本語がわかっていないことが不可解なことの理由かと思った。でもそれは仕方がない。文化の違いのために私は日本の友達が少ししかいない。
- 人間関係が日本食のようにシンプルだったらいいと思う。このことについて私の結論は、文化の違いを理解できたら、世界中のどこにいても、自分の出身国と同じような人々と出会うであろう。なぜなら友情はどこでも同じようにできるからだ。ある日本人の友達は、「日本人を理解するためには時間がかかる」と言った。そしてそれが私がもう一度日本に戻って来たい理由である。

留学生が日本での生活に適応する過程で、日本人学生との交流がかなり重要度を締めていることが最近の調査から分かっている。広島大学では、国際交流ボランティア制度[3]を整え、留学生の支援を希望する日本人学生が登録し、活動している。このボランティア制度では、希望する留学生のために日本人チューターや会話パートナー募集をし、日本人と留学生の交流を促進している。チューターは留学生の在日後の書類手続き、日本での生活や日本語の習得の支援を行っているが、その支援によって来日したばかりで日本での生活に慣れていない留学生はかなり助かっており、日本人学生が留学生の生活支援に重要な役割を果たしている。

短期交換留学プログラムでも、留学生全員に学生チューターをつけ、空港の出迎えから職員と同行し、来日した直後から支援するようにしている。また、留学生が9月末に来日後、日本での生活が落ち着き始める10月半ばには、日本人会話パートナーを希望する留学生に国際交流ボランティアを通して会話パートナー募集をかけている。全学的な国際交流活動を見てみると、全学の留学生及び留学生関係の教職員が招待される国際交流懇親会が毎年11月に開催されている。2004年度は、9月に国際交流キャンプ：ボランティア養成セ

ミナー[4]に広島大学日本人学生・留学生が多数参加し、さらに、11月には、留学生と留学生の家族、広島大学職員の参加する「りんご狩りツアー」も行われた。こうして見てくると、一見、留学生数も増加し、日本人との交流も深まったかに見える[5]。しかし、実際に日本人とコミュニケーションをし、互いの文化を理解するところまで交流が進んでいるかどうかは別問題である。

坪井（1999：63）は、日本の大学での留学生と日本人学生との交流の障害は改善されておらず、むしろ障害が増大する傾向にあることを指摘している。留学生の数が増加すると、自然に国際交流が促進され、異文化理解や相互理解が進められ、日本人学生の国際化も進むと期待しがちであるが、現状では、受け入れ国の学生と留学生は、放置されたままでは親密な交流をせず、留学生の増加が必ずしも交流促進につながらないという研究結果が国内外で多く出ている（坪井　ibid）[6]。さらに、横田（1991：81）も、坪井（1999）と同様、留学生と日本人学生の親密化の阻害が留学生の日本での留学経験への評価に多大に影響している事を指摘している。二人とも、荻原・岩男（1988）の1975年から1985年にかけての留学生の日本での留学経験や日本社会・日本人の特性に対する評価の研究に言及し、留学生と日本人との交流が障害となり、留学生の日本での留学評価が改善されていないことを指摘している。荻原・岩男(1988)の研究では、留学生の評価が10年間ほとんど変化せず、留学生を取り巻く環境に関しては実質的変化がほとんどないこと、また、日本での生活への適応の障害の程度は1995年時点でも、10年前と20年前の帰国留学生と比較して、全般的に障害を大きく評定しており、その最大の原因が日本人との人間関係にあることを指摘している。

さらに、日本人との交流の問題について、横田と坪井は何が交流の阻害原因となっているか、また今後この問題をどう解決に導くべきかを考察している。異文化交流の阻害原因として、坪井は、「異文化交流自体に内在する普遍的な要因、日本人と留学生の母国の文化差などの相互的な要因、さらに異文化交流への適応性などの個別的な要因」など多様な要素が複雑に絡まって困難さを形成していることを指摘し、その上で、日本人学生特有の問題が留学生と日本人との交流を困難にしていることを述べている（1999：64)。日本人学生特有の問題としては、1）異文化交流能力欠如以前の問題として、日本人学生同士の対人関係能力の欠如、2）日本人学生の「自己概念が不明確」から生じる自分自身の生活への自信のなさ及び生活目標のなさ、を指摘している。

坪井（1999：65－66）は、疎外感を感じている留学生との交流や支援を行うことで、日本人学生も日本人学生特有の問題の解決につながると述べている。日本人学生の、対人関係能力改善や自己の社会的有用性の発見のための、留学生との交流・支援の有用性を、坪

井は指摘する。生活目標の喪失についての効果として、1）留学生の目を通して、日本や自己の現状を問い直し、自明と思われていた生活世界を再発見するよい機会になる、2）留学生へのなにげない支援が、人の役にたつ存在として自己の社会的な有用性を発見するよい機会になる、と述べている。

また、坪井（1999：66）は、日本人学生の対人関係能力の改善に関しても、異文化間の交流は有効性を発揮する、と指摘する。日本人学生同士の友人関係では、暗黙の文化的コード（規則）が存在し、コードからの逸脱や、他者評価を気にしがちであるが、留学生との交流では日本人学生との対人関係と異なる形で交流が進む可能性があると坪井は述べ、留学生との交流の有用性を次の三点から考察している。1）日本人との間に存在する暗黙の文化的コードがないため、それを過剰に意識する必要がない、2）留学生への交流への関心が優先され、自己の対人関係能力の稚拙への注目度が低下し、心理的圧力が緩和される、3）日本語の会話では、留学生に対して優位な立場に立てることもあり、気軽に率直な対人関係を築くことが可能であり、留学生との交流が対人関係のソーシャル・スキル(社会的技術）の基本的な訓練になる可能性がある。

横田（1991：81－82）は、日本人の閉鎖性の問題をどうのりこえていくべきか、留学生との交流の中で心の国際化をどう実現させていくかについて、まず第一に、日本人学生と留学生との交流が本当に日本人学生にとって異文化を受け入れる心を育てることになるのか、また、留学生にとって、日本人との交流を深めることが実際に日本社会の理解に役立つのか、といった研究の必要性を説いている。第二に、何が留学生と日本人学生の親密化を阻害しているのか、または促進するのか、といった研究の重要性を説いている。横田(1991：86－96)の研究では、両者の親密化を妨げる要因として、留学生について5因子、日本人学生について4因子を挙げている。留学生の因子は「日本の慣習」因子、「言葉の障壁」因子、「関係づくりへの抵抗感」因子、留学生が日本人学生と積極的に友人になることに興味をもてない「興味なし余裕なし」因子、日本人学生の会話は個人の意見や主張が希薄でおもしろくないとする「希薄な主張」因子の5因子である。日本人の親密化の阻害要因は、日本人同士のコミュニケーションスタイルが通用しないことへの不安感による「無力な暗黙のルール」因子、慣れていないためによる不安感や遠慮といった「漠然とした不安と遠慮」因子、「言葉の障壁」因子、「日本人集団への消極的アプローチ」因子、の4因子である。

留学生と日本人の両者の因子について指摘できることは、「閉鎖性」という特質は、必ずしも日本人学生側のみの問題ではないのではないか、ということである。横田（1991：92）の調査結果では、日本人学生の回答で、留学生についてクラブなどに参加しない、日

本人のなかに飛び込んでこない、閉鎖的である、生活と勉強だけで精一杯である、などと示しているのは興味深い。日本人の閉鎖性は、よく指摘される日本人の特徴の一つであるが、それを留学生側の閉鎖性の問題として異文化間のコミュニケーションを考察することも大切なのではないかと考えられる。日本人が日本人だけの集団を作っているので、留学生がその中に入りにくいことが指摘される割合と比較すると、「留学生が別の集団を形成しているという印象を日本人学生がもっている」ために、「留学生は閉鎖的だ」と日本人学生も感じていること（横田　1991：92）は、あまり指摘されない。

荻原（1991）は、留学生教育を考察する上で日本人との人間関係が最も重要な位置を占める事を強調しているが、この点は、留学生が実際にどの程度日本人との交流を深め、真の異文化理解を深めているかの問題と関連して、国際交流を進めていく上で重要な事項である。実際に留学生が日本人学生とどのようなコミュニケーションをしているのか実態がつかみにくく、大学で企画されるイベントや、チューター、会話パートナーなどとの交流も実際は表面的なものに終始していて必ずしも真の異文化理解につながっていない可能性もあり、今後の研究課題である。

次に、留学生と日本人学生の親密化を妨げる要因として挙げられた、留学生が日本人学生に対して抱いているイメージ、及び留学評価について考察してみたい。荻原(1991：37)の調査では日本人のイメージを「親和性」「勤勉性」「信頼性」「先進性」の四つの側面から測定している。「勤勉性」のイメージが安定しているのに対し、日本人との人間関係と直結した「親和性」のイメージは、日本での滞在が長くなり、日本語が上達した留学生ほど厳しく評価していることは興味深い。また、荻原（1991）の調査では、留学生の留学経験の諸相を「学校での勉学内容」「日常の生活状況」「留学生に対する日本人の態度」の三領域に分け、来日前の期待と実際の体験との相違を分析している。その結果、本国の友人に日本への留学を勧めるかどうか判断する場合の規準の重要性の順は、「留学生に対する日本人の態度」「学校での勉学内容」「日本の生活状況」の順になっている[8]。

ここで大切なことは、留学生の来日の目的によって、日本での留学生活への期待も異なり、その結果、留学生活も様相を異にし、評価指標も異なることである。荻原の指摘する欧米諸国からの留学生とアジア諸国からの留学生の日本留学の目的の違いと、その違いによる日本留学の期待や評価指標の違いに着目する必要がある。欧米諸国からの留学生は、日本の文化・社会に対する関心から留学する傾向が強く、文化的行事など大学外で多様な体験を積むことで、留学目的を果たす側面があるのに対し、アジア諸国からの留学生は学士・修士・博士などの学位取得を目標として来日しており、その結果、学業中心の毎日になりがちである。その結果、欧米系の学生は日本での滞在期間が短い傾向があるのに対し、

アジア諸国からの留学生の日本滞在期間は長期になりがちである。また、この滞在期間の違いによって、日本留学に対する評価にも格差が出ていることも認識しておく必要がある。

さらに、荻原（1991：40－41）は、欧米系の留学生は「学校での勉強内容」のみ「期待以下」と評価し、「日常の生活状況」「留学生に対する日本人の態度」では「期待以上」という評価をしている。これは、三項目すべてについて「期待以下」と評価し、「留学生に対する日本人の態度」に強い不満を示したアジア系留学生と対照的である。興味深い調査結果は、日本での滞在期間が長くなるほど、そして日本語能力が高くなるほど、日本人との人間関係を否定的に評価する割合が増加している点である。日本語能力の向上と共に日本人との交友関係も築きやすくなり、関係も深まっていくことが予測されるが、実際は、滞在経験が長く、日本語能力が高くなるほど「外国人に対する日本社会の根深い閉鎖性」、「見えない壁」を留学生は感じていると荻原は指摘する（1991：44）。その点を考慮すると、日本滞在期間が短い傾向にある欧米系の留学生が、短い留学期間の体験をもとに、日本人の態度について肯定的評価をしていることは理解できる。荻原（1991：45）は、日本滞在期間及び日本語能力向上とともに外国人に対する日本人の態度、偏見や差別に対する不愉快度が増し、日本人の親切や好意的待遇を愉快とする割合は、来日半年足らずの日本語のうまくない留学生でかなり高いと指摘している。この事象について、一年未満しか日本に滞在しない短期交換留学プログラム留学生と、長期滞在する学位取得を目的とする留学生とを比較すると日本留学への評価に差が出ることが予測される。

今回の短期交換留学プログラム留学生のスピーチを見てみると、日本滞在が１年未満であっても、日本人の閉鎖性を感じている。ということは、もし、さらに日本での滞在期間が長くなれば、さらに閉鎖性を感じる、とも考えられる。しかし、日本社会の閉鎖性について結論を出す前に考慮に入れておきたい点がある。留学生への閉鎖性が、日本人・日本社会独特のものであるかどうか、という点である。アメリカに留学している留学生[9]も、アメリカ人との交流が進んでいないと感じていることを Mary Hinchcliff-Pelias・Norman Greer の研究（2004：７－11）は指摘し、その要因を分析している。それによると、アメリカ人が留学生に対し、グループとして否定的イメージを抱いており、留学生について、文化的に外部者で世間知らずなため困惑している、さらに、外国からの学生であるため心理的に不安定で、受身的であると見なしているという。さらに、留学生は留学生へのアメリカ人の態度について、多文化への興味のなく鈍感で、留学生をステレオタイプ化して見る、留学生を個人として知ることに興味を失っている、と指摘している。

さらに、Hinchcliff-Pelias・Norman Greer の研究（2004：11）によると、アメリカ留学した留学生側も、異文化間のコミュニケーションを躊躇しており、その要因として、言語

力及びコミュニケーション能力の問題、異文化への理解不足、そういった中に自分をおくことへの違和感をもっている事が挙げられている。さらに、留学生が新しい環境への自分の適応能力について非現実的な期待を抱いて留学してきたことも要因となっていると述べている。授業では、自分の意見が自分の国の代表としてとられることを不快に感じ、他のクラスメートから隔離され、無視されていると感じている。国にしばられない一人の人間として捉えて欲しいと感じている。英語力の欠如や誤解が異文化間理解を妨げていることを留学生も認識しているが、同時に、アメリカ人がコミュニケーションにおいて互いの理解を明確にしたり、発話が理解されたかの確認を怠りがちであると感じているという。Julie Spencer-Rodgers・Timothy McGovern（2002：611）は、言語を母国語としない人とのコミュニケーションにおいて、その言語を母国語とする人は、苛立ちとフラストレーションを感ずることを述べており、言語の障壁はどの国においてもコミュニケーションの障害になることは事実のようである[10]。従って、「言語の障壁」問題は、日本人と留学生に限られたことではない。

田中（1991：98－99）は、「在日留学生の文化的適応とソーシャル・スキル[11]」の研究において、Furnham と Bochner による英国の留学生400人の社会的行動の困難度の研究（1982）に言及し、自国文化が英国文化から隔たった文化圏の学生ほど、社会的行動においてより困難を経験していることを述べている。この研究によると、英国人の友人を持つ留学生は５人に１人弱のわずか18％であった。留学生は英国人と個人的なつきあいを確立しておらず、形式的な関係を中心にしている可能性があることについて述べている。これは、日本での留学生が日本人学生と個人的つきあいがあまりできず、表面的なグループ行動に終始しがちである事象と似ている。外国人に対し、個人でなく、グループで交流しようとする態度は、日本人特有のものでなく、どこの国の人にもあてはまる現象である可能性がある。

このようにみてくると、留学生が経験する留学先での困難さ、現地の学生とのコミュニケーションの問題は、日本だけに限らず、どこの国の留学生も、程度の差はあれ感じていることがうかがえる。さらに、田中（1991：100）は、山本（1986）らの研究[12]に言及し、日本人学生がアメリカに１年留学した場合の日常の社会的行動場面において感じる不安や困難度を測定した場合、主張や社交などのアメリカで重視される行動が因子としてあげられており、その習得がアメリカ生活への適応において重要であることが指摘されていることを述べている。

この点を踏まえたうえで、田中（1991：102－109）の日本的ソーシャル・スキルをめぐる在日留学生の困難についての研究に言及してみたい。田中は調査結果に基づき、困難の

要因を六項目（間接性、通念、開放性、異性、外国人、集団）に分けている。「間接性」については、日本人の遠慮や謙遜、自己主張のなさなど、「通念」については、日本独特の礼儀や儀礼、義理や恩、規則などを重んじる社会通念が外国人には理解しにくいことを挙げている。「開放性」は、日本人は自分を開放して感情をおおらかに表したりする自己表現を抑制する、「異性」に関しては、異性関係が閉鎖的と感じたり、またその逆に開放的過ぎると感じたり、と自国の文化と差があり、外国人にとって違和感を覚えるものである。「外国人」については、外国人とのつきあいに慣れておらず、厚遇しすぎたり、英語の練習台にしたり、英語圏に目を向けがちであること、「集団」に関しては、周囲のグループとの同調を優先しがちで、そのため個人の意思が尊重できないなど不自由を感じる、というものである。外国人が異文化で生活する際の困難を念頭においた上で、日本人にありがちな問題に目を向けていく必要がある。

Julie Spencer-Rodgers・Timothy McGovern（2002：610－611）が述べているように、異なる文化的背景を持つ人とのコミュニケーションでは、意思の疎通において起こる障害から、反感的な感情を引き起こし、不安とぎこちなさを感じやすい[13]。Julie Spencer-Rodgers・Timothy McGovern（ibid.）によれば、感情の表現や、言葉によらないコミュニケーション方法の相違によって、異文化間の理解は阻害され、価値観や習慣の相違は誤解やコミュニケーションの決裂をひきおこし、不快感やストレスをひきおこすという。さらに、文化的相違からの誤解などから意思の疎通がうまく図れない状態が続くと、文化の異なる人への否定的評価をする価値観を持つようになる、と指摘する[14]。この現象を留学生の言動にみることは時々ある。異文化への違和感を感じ始めた時点で、「日本人は･･･」とか、「日本は･･･」といったステレオタイプ的な見解を持ち、不快感を日本人・日本全体に一般化して特徴づける傾向である。

日本社会には日本独特の儀礼があることは否めないが、それぞれの文化にその文化特有の儀礼があることも念頭におき、上記の日本での問題が日本の留学生のみが感ずることなのかをこれから検討し、少しでも、相互理解が促進できるよう努力していく必要がある。田中は（1991：109)、異文化における行動が自分にとって意外なものであった場合、すぐに否定的にとらえるのでなく、自分の文化と異なる方法や考え方があることを理解できることが、関係悪化を防ぐことになると指摘しているが、このことは、異文化と接するどの国の人にも共通に言えることであろう。自分の文化だけを基準にしてものごとを見るのでなく、異なる文化的背景を持つ人は、異なる目でものごとを見、行動していることを理解しておくだけでも、不必要な摩擦・違和感を緩和することができるかもしれない。田中（ibid.）によると、「異文化適応とはその社会におけるソーシャル・スキル（社会的技能）を使いこなせるようになること」であり、その習得として、その社会での価値体系の理解

に基づいて、行動の意味を誤解なく認知して過度の不安なく行動できることであると指摘している。その領域に達するまでには、多様な異文化の体験と、異なる価値観や行動様式を表面的な差異として捉えるのでなく、歴史や文化的背景までも理解できる真の異文化理解が必要となってくるであろう。外国人の日本社会での生活の困難さは、日本特有のものでなく、他国に留学した留学生もその国特有の文化的要因で困難を感じていることを理解するだけでも、日本での留学体験がもっと広い視野から見ることが可能になると思われる。

＜英語練習を目的とされることへの違和感＞

- 失礼だと思ったのは、たまに私と会う約束を破ったり、その日に来なかったり、英語を練習するために友達を一緒に連れて来たりした事である。私が見た中で、もっと失礼だと思った事は、日本語を練習していると、それが趣味であると仮定することだ。
- 花見などを通じて日本の友達ができたが、皆英語しか話そうとしない。私達は日本語を話したいのに、日本人は英語を話したい。

友人を連れてくる問題に関しては、日本人の人間関係の構築の仕方と、それと異なる文化的背景を持つ留学生の人間関係の構築の仕方の相違により、誤解が生じていることも考えられる。また、日本人学生はあまり深く考えず、ただ外国人であるというだけで、英会話の練習目的で、自分の日本人の友人と留学生の会合に加わろうとしたりする。実際にはコミュニケーションもせず、外国人との接点を見つけることのもの珍しさから友人について来たりと、双方の考えにずれが生じていることが伺える。また、コミュニケーションしたくても、経験不足からほんの挨拶程度に終わってしまうために、留学生から見るとただの英語の練習だと捉えられたり、それ以上の発展がない状況にあるとしたら、残念なことである。

人間関係の構築について、横田（1991：93）は、留学生は初めから一対一の関係を構築することを友人形成の基本として考えているのに対し、日本人学生は、集団に属することで自然に友人関係が形成されてくるものと考えていると指摘している。この相違は、日本人側の集団志向だけによって起こるのではなく、留学生の場合、留学生として団体でなく個人としての自己を認識しがちな行動が留学生を一対一の関係構築に向かわせやすいことからも生じると論じている。したがって、他の国でも、留学生の一対一の関係構築と留学先の学生の集団志向のために同様の問題が生じている可能性がある。また、横田（1991：93－95）は、日本人が集団活動への参加を通して友人形成をするのは、個人的なアプローチでありがちな初期段階の緊張を低減できるからであると述べている。さらに、横田は、浜口（1982）と木村（1972）の日本人の自己と他者との関係の構築についての研究に言及し、日本人学生が、集団活動における緊張の低減という作業のなかで、相手との関係を見

極め、暗黙の甘えがどこまで許されるのかなど、「心の許せる‘世界’を決定しようとしている」と説明する。

<外国人であることで区別された経験>

- 友人はよくサイクリングをするが、たまに車に乗っている人に「すいません、何々のところはどこですか」と聞かれるが、顔を見て外人だと気付いたら「すいません」と言って行ってしまうことは嫌である。
- レストランで日本人の友人と食べていた時、ウェイターが来ると日本人だけに注文を聞いて私を無視するのは嫌である。日本語で注文しているのに、私が透けて見えているみたいで見えないのかなと思ったことは何度もあった。こういうことをされると自分の日本語に自信をなくすから嫌である。
- 友人は駅で新聞と飲み物を買おうとして、何が欲しいか店員に説明をした時、その人は分かっていない顔をして、他のスタッフを連れて来た。友人は最初からもう一回全く同じことを伝えて、ものを買うことができた。私の友人は日本語専攻の卒業生でペラペラ話せる。自分と話したくないのかなと思って友人は嫌だった。
- 友人は「たまに私は鼻が二つある日がある」と言う。何でと聞いたら、それはお店に入ると皆が見るから私は鼻が二つあるほどおかしく見えるかなと思うんだと説明した。

<その他>

- 興味深いことに、日本人は学校を卒業、または結婚したら、日本的になる。
- 私は日本の文化とヨーロッパの文化の違いをしばしば感じた。自殺の事件を例として対比してみよう。日本文化では、切腹は悪いことではなかった。それに対し、ヨーロッパ文化では、つい先ごろまで自殺した人に対して、葬儀を行わなかった。
- 日本の若い人は日本文化の代表ではないと思う。日本はかなりアメリカ化されていると思う。日本人は、アメリカ人に憧れて彼らの真似をする。とりわけ若い女性によくこの傾向が見られる。
- 彼らは、このような質問をする。「アメリカに行ったことがありますか。」私をフランス人と知ると、「フランス人はアメリカのことがあまり好きではない、と思う。」と言う。彼らはよくアメリカにまつわる話をしようとする。その上、外国人をアメリカ人だと推測する。

倉地（1991：66－70）はコミュニケーションの深層構造や異文化接触から異文化理解に至る学習者の心的な過程を考慮した教育の展開にあたり、欠落しがちな点を論じている。倉地は、学習者の目的文化との接触の機会の拡大だけでなく、**接触の深化（異文化接触に伴う相互交渉の深化）の追求の重要性を指摘している。**様々な活動に参加することで異文

化接触の場は広がっているものの、異文化間コミュニケーションに必要な相互交渉の深化が必ずしも進んでいるとはいえないからである。この点は、私自身が短期交換留学プログラム留学生の国際交流イベントを企画し、交流を進めるにあたり、懸念していたことでもある。

倉地の指摘するように、日本における異文化間コミュニケーションの最大の問題が言語能力の欠如でなく、目的文化〈日本文化〉へのアプローチの仕方が分からないことにある点を認識する必要がある。日本人が閉鎖性であるためにコミュニケーションが困難であると考え、接触の深化は不可能と判断し、自ら日本文化に積極的に働きかける気力を喪失していることが懸念される。近年、大学でも多様な国際交流のイベントなどが開催されるようになってきたが、異文化接触の拡大だけ表面的に追及され、実際は接触の深化は進んでいない可能性がある。倉地（1991：68）が述べているように「学習者自身の中に異文化の人々との人間的な関わりを深めたいという内発的な動機づけを作り出すこと」は、異文化間コミュニケーションに不可欠であり、今後留学生がその動機付けを失わないよう支援していける体制を作ることが大切である。表面的な交流ばかりが進められ、実際は、日本文化への理解を積極的に深める意欲をなくしていることも考えられ、今後の大きな研究課題である。

留学生の中には日本語コースを受講している学生も多く、日本文化・社会で期待・要求される言語表現や敬語の使い方など表面的なことを学ぶ機会は多いが、「異文化での対人相互交渉における人間の精神活動や心的過程を含む深層構造の問題」（倉地　1991：69）への理解なくしては、留学生の日本文化理解への動機付けも、真の異文化間コミュニケーションの実現も困難であると考えられる。今後、日本人・日本社会への理解を深めることで、日本人の行動様式も理解できるようになり、異なる側面から日本文化を観察できるようになる可能性もある。また、日本人に対しても、地域社会の中で、これから増加する傾向にある外国人への理解を深められる機会が必要である。

日本の教育について疑問視している事項

- 勉強して、または日本人の友人の話を聞いて、皆に気づいてほしいことがある。特に私が思った大切なことは教育である。日本人はよく勉強をする人達だと思うが、若いころからたくさんの情報を覚えられる人は頭がいいという考え方は大間違いだと思う。私の友人は高校の先生で「良い大学に入るには、重箱の隅をつつかないと」と言ったことはよく考えさせられた。彼の意味はつまり、知識豊富に見えるためか、他の人とランクの区別ができるように他の人よりたくさんの情報を習っているようだ、ということだ。こ

ういうことはよくないと思うし、もっと役に立つ事を勉強した方がいいと思う。何のためにやっているか分からない。

- 日本人の友人から「皆勉強したくないよ。嫌々やっているけど、いい大学に入れたら一生は決まるよ」と言われた。例えばオーストラリアやアメリカでは有名な大学に入ることはそんなに難しくない。むしろ、自分でたくさん勉強したり、研究をしたりした上に、知識も増やして考え方も広げないと卒業することは難しい。先生や大学の目標はもっと広い視野を学生に持たせ、自分自身の創造的な考え方を高めることだからだ。オーストラリアやアメリカでは教室に入ると高校を卒業したばかりの大学生は50代の人の隣に座ることもよくある。日本人でもインド人でも世界の中の集まった人と議論して、その結果自分の考え方も広がると思う。
- 日本の大学に年配の人があまりいないが、オーストラリアにはたくさんいる。オーストラリアの大学では、授業に行かないで、家で勉強できるシステムがある。そのため、大人になってからも、家で勉強し、大学を卒業できる。しかし、日本は違うので、びっくりした。
- 日本の大学はアメリカの大学と何が違うかも分かった。日本では、大学に入ることは難しいが、入った後はもっと楽になると聞いた。日本人の友人の話によると、大学に入るため、高校生の時「塾」へ通ったし、勉強もすごく頑張っていたと話してくれた。アメリカはそれと反対で、私の経験では、高校の時は大変楽だった。しかし、大学は本当に大変だ。アメリカの大学は授業の数が日本の大学より少なくても、その授業で良い成績をとるのが難しい。それで、卒業をすることもアメリカはもっと大変だ。
- 私から見ると、日本の大学ではほとんど日本人しかいない。留学生の授業には日本人はめったに来ないし、逆に普通のコースを取っても、外国人は少ない。しかし、気付いた事は学生が黙って質問せずに先生の話をずっと90分も聞いていて、議論することは比較的に少ないことである。先生は教えて、学生は習う。私から見ると皆はロボットのようになっている。たくさんの学生は先生の話を聞いてないようで、寝ていたり、携帯でメールを書いたりしている。
- 先生が悪いとは言っていない。これは日本全体の大きな問題なので皆で考えたほうがよいと思う。最近、日本人の多くは改善した方がいいと思っているが、なかなか行動しないので永遠に状況が変わらないと思う。幼稚園から大学に入ることを考えていて、知識は豊富だが、それを実践することを学んでいないと思う。世界の中には色々な人がいるし、それぞれの特技がある。皆は一緒ではない。子供の意見を認めないと子供がつぶされていることになる。もっと自由にさせて、広く考えさせて欲しい。
- 高校を訪れた時、日本人の高校生は恥ずかしそうだと思った。小学校の子供達は、外国人の私が大変気になるようだった。子供はたくさん質問をするが、高校生はそうではなかった。

日本の大学教育を問題視する留学生の意見は、留学生だけでなく、日本人も共通に持っているものであることを、荻原（1991：47）は指摘している。江淵（1991：18）は、留学生の文化的適応や、日本社会での社会的スキルの理解を援助するための指導方法の研究の必要性を説くと同時に、異なる教授方法への適応問題も重要な研究課題としてあげている。荻原は欧米での大学における留学生の学習スタイルと、大学での日本の教授スタイルの適合性の研究への関心の高まりについて述べたうえで、日本型の教授スタイルの特質を明確にし、日本型の研究指導法の問題点を究明し、留学生のニーズとカリキュラムの整合性を検討することが必要であると指摘している。十年以上たった現在でも、教授法についての問題はあまり明確にされず、あるがままに放置されているかに見える。もし、現状によって、留学生が学習意欲を喪失しているとすれば、とても残念である。この問題は、前述した、日本人学生の学習意欲喪失とも関連して、共に解決の糸口を見つけられる問題ともいえる。日本人学生が、留学生の日本文化適応を援助する過程で、目的達成意欲をかりたてられ、自分が何らかの形で社会に貢献できていることを感じることができれば、日本人学生も留学生にとっても、相互理解につながる。さらに、日本型の教授方法とは異なる指導方法があることも留学生との交流で学ぶ事ができれば、何らかの刺激になり学習意欲がわくことも考えられる。日本人学生と留学生が何らかの形で共に授業を体験でき、異なるスタイルの授業を体験する機会が持てれば、また相互に視野も広がり、自分の新しい可能性も模索できる可能性もある。

日本人学生と留学生との交流の場が少ない理由の一つに、授業を一緒に受講する機会が少ないことが挙げられる。少なくとも広島大学の場合、一部の大学院の授業と、ほんの一部の学部の授業を除いては日本人と留学生が共に授業を受講する機会がない。実際の状況を観察してみると、まず、日本人学生向けに日本語で行われる授業には学部生レベルの留学生は、日本語レベルが十分でなく参加できない。さらに、短期交換留学生向けに英語で行われている授業は、日本人学生には開講されていない実態がある[15]。日本人学生が、様々な国からの留学生が受講している授業に参加した場合、他国の学生の発言力に驚かされる場合が多い。必ずしも留学生全員が活発に発言するわけでなく、国や個人差も大きいが、たいていの場合、留学生の活発な議論をきくと、受身的に聞く授業に参加している傾向の強い日本人学生はかなり刺激されるようである。

江淵（1991：15）は、日本人が留学生や外国人を“特別扱い”しがちであることを指摘し、それが善意から出たものであるにかかわらず“差別”に転化しかねない危険をはらんでいることを述べている。さらに、日本人学生と留学生を別枠で扱うことで、交流の阻害になっていると指摘し、「同じ学問を志す学徒として、留学生と自国民学生とを対等に処遇することが大原則である」ことを強調している。江淵（ibid.）の指摘するように、自

国学生と外国人学生との“統合”を目標とする「統合主義」をめざすのか、「分離主義」をめざすのかで意見が分かれるところであるが、江淵（ibid）が述べるように、“留学生顧客論”が議論される中、“平等に扱う”ことの意味について見解が分かれている現状がある。留学生が言語的、文化的、経済的にハンディを負っていることを考慮すれば、日本人学生と対等に扱おうとすることが逆に「差別」になりかねない事を念頭に置いておかねばならない。分離主義のいう、留学生への言語補修教育、奨学金、宿舎、論文指導などで特別扱いすることにも正当性があり、どのような形で留学生を支援していくか検討が必要である。実際、自分の体験でも、言語問題などから、留学生を日本人と全く同様に扱うことで留学生にとって日本での生活がかなり不便になってしまったり、それによって苦痛を感じてしまう側面もあり、「対等」の解釈は複雑である。また、逆に何から何まで特別扱いすれば、自立性や自発性を育成する機会を失い、すべてに渡って“顧客”的に対応することを期待する結果になることも懸念される[16]。さらに、江淵(1991：15－16)の言う、「統合主義」対「分離主義」問題は、日本人留学生と留学生との交流を深め、国際理解を進める点において、重要な要素となるので軽視はできない、という見解は、今後の大学の国際化を考える過程で重要である。

留学生と地域の人々との質疑応答・意見交換：地域の外国人への視点

留学生のスピーチの内容について様々な視点から考察してきたが、次にスピーチ後に行われた地域の方々との質疑応答について考察してみたい。

＜質疑応答の形態＞

留学生六人の日本語スピーチ終了後は、気軽に意見交換できるよう質疑応答の時間を設けた。実際は日本語スピーチはほとんど原稿を見ながらであったので、スムーズに進んだが、質疑応答を自由にできるだけの日本語能力を持ち合わせていないスピーチ発表者がほとんどで、留学生と地域の方々との意思疎通のため、司会者である私が日本語と英語の通訳として入った。日本語で自由に発言できることで、町の方々からたくさんの質問が出た。まず、質問を日本語で述べてもらい、司会者である私が英語に通訳して学生に伝え、また英語での回答を日本語に通訳して聴衆に伝えるという形をとった。簡単に日本語で答えられそうなものについては、なるべく日本語で述べてみるよう留学生に示唆し、奮闘してもらった。町の方々から積極的な質問の声があがり、回答では留学生も自分の感じたことを率直に述べていた。また、聴衆席にいた短期交換留学プログラム留学生も質問した。

スピーチ後の質疑応答部分を実施するにあたっての問題は、留学生の実際の日本語力である。留学生がスピーチをなんとか書き上げ、原稿をもとに発表できても、質疑応答まで

日本語で自信をもってできないのが実態であることが多い。その意味で、いざという時は通訳できる教員がそばにいることで積極的に質疑応答を促進し、遠慮せず質問できる環境設定ができたといえる。また、質問する日本人の方々も通訳に頼れることから、ものおじせず、日頃外国人の方に伝えたかったことなども躊躇せず発言できる場ができたといえる。

＜コミュニティーでの発言の難しさ＞

地域社会での国際化・国際交流イベントを開催するにあたっての課題は、滞りがちな地域社会のコミュニティの中で、いかにして刷新的な国際交流のイベントを開催していくかである。また、地域の参加者にとっても、長年に渡って根付いている複雑な人間関係の存在するコミュニティで開催されるイベントでは、かなり気を使って出席している実情がある。イベントのタイトルには現れなくても、出席者の人員に関して暗黙の了解がある場合があり、実際出席してもよいものかどうか、また目立つ形で発言してよいのかなど、かなり気を使っている。

また、会場での意見交換会などにおいても、必ずしも、全員が自由に発言しているわけではない。地域に生活が密着している人々にとっては、公私の生活部分の線が曖昧な部分もあり、何気ない発言が波紋をよんでしまったり、周囲の人達との軋轢の原因になったりと、発言にかなり気を使うため、発言を控えている人々がいることも気づかされた。閉鎖的な町では、その人が地域の団体で重要な役割を果たしているか、また本人が町の出身であるかどうかによって発言権について暗黙の了解がある場合もある。また、逆に、平素は表でいえなかった閉鎖的な町の人々の態度について、たまっていた不満を吐露するような方もおり、おもしろい意見交換会になった部分もある。

質疑応答について全般的にみてみると、留学生が、日本に興味を持っている事が分かったことについて、地域の皆さんがとても嬉しく思っていることが伺えた。とても感激し、「今日は皆さんのスピーチを聞かせていただいて、大変嬉しく思っています。それで、一人一人に一言ずつ感想を言わせください。」と述べて一人一人のスピーチについてコメントした方もいた。

＜地域の方から留学生への質問＞

Q1．日本で、よかった経験といやだった経験は何か。

Q2．日本にとても興味を持っているということであるが、一度国に帰った後、もう一度日本に帰ってきて、日本の中学生などに英語を教えてみたいか。

Q3．留学先に日本を選んだ理由は何か。また日本での経験をどのよういい生かしていくか。

Q4．日本で、マナーについてどのように感じたか。

Q5．日本では、自分と異なる意見を持つ人を認めない傾向があると思う。だから、外国人の人を見ただけで、「この人は外国人だ」という目で見たりする人が多いと思う。日本人が、他人に気持ちを伝えたり、外国人とコミュニケーションをとる時に，気をつけたほうがいいと思うことがあれば、教えてほしい。

＜応答＞

上記の質問について、地域の人々のコメントと留学生の意見を「日本人とのコミュニケーションの問題」、「日本人との文化的相違」、「日本人のマナー」の三項目に分類し、整理してみた。

[日本人とのコミュニケーションの問題]

地域の方からのコメント

- （日本人とコミュニケーションがとれないということついて）
  日本は島国で外国の人をあまり受け入れていないので、このような状態になったのだと思う。わたしも英語を勉強していた時、外国の方がそばにいるだけで嫌悪感を感じていた。全体的に、外国の方をほとんど見たことがない。そういう中で呉市では、中学校を主に、ALTとして英語の教師を受け入れてきた。私達はもっと、外国の方との距離を縮めて、外国の方に興味を持っていけば、中に入れてくれない、といった気持ちにならないと思う。

留学生のコメント

- 日本人は、恥ずかしがり屋だと思う。日本人は、英語がうまいし、きちんと習っているのだから、話しかけていったらいいと思う。日本人は、心を開いて外国人ともっと話をしていくのが大切だと思う。
- 外国に留学している人達は、言語や文化の違いがあるということを、理解するようにすることが大切なのではないか。

[日本人との文化的相違]

地域の方のコメント

- 自分が外国に住んでいた時の経験とだぶって、留学生の方々のスピーチを聞いた。自殺について宗教的な考えの違いがあると思った。ハンガリーにいたときも、現地の人たちが、腹切りだとか言って、ちょっと馬鹿にした感じがあった。理由が分からず、黒澤さんの映画の影響もあってそう言われるのかなと思っていたが、宗教的な違いがあって、そう言われていたことが、今分かりました。

［日本人のマナー］

地域の方のコメント

- 11年前に、バンクーバーの親戚の所に２ヶ月ほど行った。その時、いやな思いをすることがなかった。しかし、日本に着いて成田についた途端、いやな思いをたくさんしたことがある。去年再度行った際、現地の方にぶつかりそうになったのだが、謝ったのににらまれた。そして、レストランを出るまで、ずっとにらまれた。マナーは大切だと思った。日本でマナーについてどう感じたか伺いたい。

留学生のコメント

- タクシーとバスの運転手さんのマナーがすばらしい。プロ意識を感じる。制服を着たり、白い手袋をしている。イギリスやフランスではあまりマナーがよくない。

（日本でのマナーでいやだったこと）

- 地面にたんやつばを吐くこと
- 道などで、無理やり広告を渡してくること。オーストラリアでは、これは違法行為である。
- ラーメンを食べる時、音を立てる。オーストラリアでは、吸う音を立てると、それは大変失礼なことだと思う。

日本社会と異文化理解：留学生の視点を分析して　ー課題と問題点

留学生の日本人・日本社会に対する見解を分析する過程で疑問に思ったことは、留学生の指摘する日本社会での留学生の扱い・対応が、本当に日本独特のものであるのかどうかという点である。留学生の感じる日本との文化的相違も、他国に留学した場合も異なる形で感じることである可能性も高い。確かに外国人として日本社会で生活することは多様な人種や文化を共有する国々と比較すると困難であることは事実である。しかし、本稿での議論で示唆したように、日本以外の国に留学した留学生もかなり類似した体験をし、外国人として生活する困難さを体験し、文化的相違による違和感を感じていることが既に調査結果で結論付けられている。このようにみてくると、日本で直面する留学生の問題は、留学生を抱える国ならどこでも考慮しなくてはならない問題であるともいえる。

「閉鎖的」などの言葉で表現される日本人の特徴も、他国における現地の人々の留学生に対する態度と共通していることも示唆した。留学生の問題を考える過程で、即座に日本固有の問題として捉えるのでなく、外国人、留学生に対する受け入れ国の人々の態度という観念を常に念頭において考察したほうが、改善に向けての策を講じやすいのではないかと分析した。日本人の礼儀正しさや意思表示の不明確さ、グループ意識やヒエラルキーの意識についても、類似した礼儀を持つ国は多くあるし、外国人を区別して心を開かないの

は、ある程度どこの国も類似してはいないか、と考えられる。常に何と何を比較とし、どのような文化的背景を持った人が、基準をどこにおいて意見を述べているかを考えながら議論を進めていかなければ、論議の根本の部分でずれが生じることとなる。今回日本語スピーチを発表した6人は、アメリカ、オーストラリア、フランス出身であり、発表者の見解は自国の文化的視点から行っており、比較がすべて自分の国と日本との間でのみ行われていることを念頭においておく必要がある。もし、発表者が全く異なる文化的・宗教的背景を持つ留学生であった場合、スピーチの内容も全く異なったものになっていた可能性もある。出身国、その人の異文化体験によっても、日本に対する捉え方が異なるので、日本についての批評は必ずしも同じ視点からみたものではないことに注意が必要である。

さらに、気をつけなけらばならないのは、単純に一つの体験を一般化して、日本ではこう、外国はこう、といえないということである。また、個人差もあり、即日本の国民性、文化的相違として特徴付けることにも問題がある。これは、スピーチを発表した留学生にも、質疑応答で発表した地域の人々にも言えることである。特に短期の旅行や短期滞在について、少ない体験をもとに、その国の人々を一般化して特徴づける傾向をよく見る。例えば、地域の方の意見として出た現地でマナー違反した場合の態度など、一度の体験をもとに、その国の人達の態度を一般化することは不可能であるし、また、外国旅行で楽しんだ場合の体験と、実際自分が生活している日本を単純比較することはできない[17]。

異文化理解については、授業などの勉学面においても、国際交流などの社会的側面においても、今後も多くの研究課題が残されている。さらに広い視野から異文化理解の問題を考察するためにも、日本だけに限らず、他国での留学生の扱いや、異文化理解教育についても目を向けていくことが大切である。今後、さらに留学生が増加していくことが予測されるが、日本での異文化理解の問題に取り組むためには、表面的な理解だけに限らず、相互理解の深化がはかれるよう努力していく必要がある。留学生が日本での真のコミュニケーションは無理であると判断し、日本文化に働きかける意欲を喪失することがないよう、模索していかなければならない。

題名：国際交流　「広島大学留学生から見た日本」

日　　時：7月12日（土）
午前10：00　開演
主　　催：吉浦公民館

スピーカー：広島大学留学生（6人）
場　　所：4階　大ホール
入 場 料：無料

＜当日日程＞
10：00　開演　あいさつ
　　吉浦公民館　支所長　山田俊吉郎
　　広島大学　留学生センター　恒松直美

10：10　留学生スピーチ（各スピーチ後　簡単な質疑応答）

10：10－10：25　**Ben Dyer（ベン・ダイヤー）**
　　オーストラリア（Univ. of New England）
　　「好きな日本、嫌いな日本」

10：25－10：40　**Yoon Mi Oh（ユーン・ミ・オー）**
　　アメリカ（Univ. of Nevada, Reno）
　　「私が思った日本と私が体験できた日本」

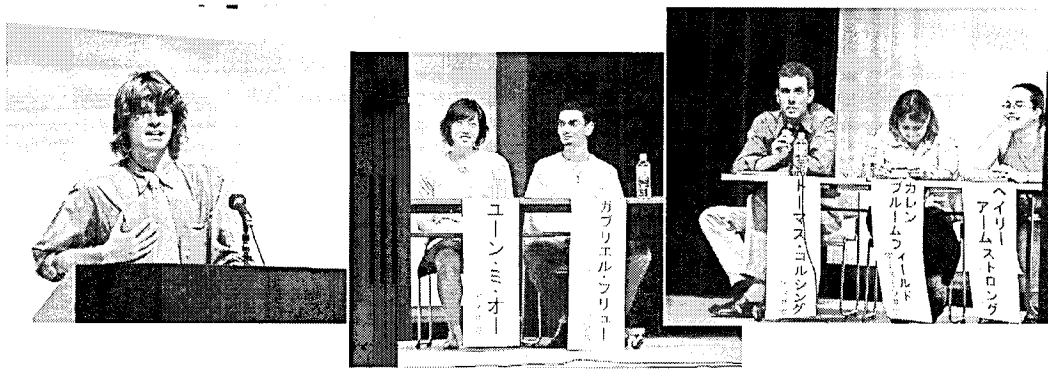
10：40－10：55　**Gabriel Brieu（ガブリエル・ブリュー）**
　　フランス（Leeds Metropolitan Univ.）
　　「私の目を通した日本の印象」

10：55－11：10　**Hayley Armstrong & Karen Bloomfield**
　　（ヘイリー・アームストロング／カレン・ブルームフィールド）
　　オーストラリア（Univ. of New England）
　　「すみません、わかりません」

11：10－11：25　**Thomas Kjolsing（トーマス・コルシング）**
　　アメリカ（Univ. of Minnesota）
　　「日本の世代格差」

11：25－12：00　**留学生との意見交換「地域と国際化」**
　　（広島大学留学生及び参加者全員）

12：00　閉会　あいさつ　広島大学　留学生センター　恒松直美



注

1　HUSA プログラムで広島大学に来る留学生のうち、大半が９月末に来日して、秋学期からプログラムに参加し、秋学期と春学期の二学期間勉学し、８月初めに帰国している。一学期間のみ滞在する留学生もいるが、ごく少数である。

2　留学生の日本語スピーチからの抜粋部分は、なるべく留学生が日本語スピーチで使用した表現を使用するようにした。スピーチでは丁寧形を使用していたが、普通形で表記した。また、地域の方々に対する敬語表現も省略した。

3　留学生センターは1998年６月に「広島大学国際交流ボランティア」を組織し、留学生の日本での生活を支援すると同時に留学生と日本人学生の交流、そして相互の国際理解を促進している。学生同士の相互交流を希望する学生、ボランティア活動に関心のある学生、留学を希望している学生など、現在約350名の登録者がいる。学部生から大学院生まで全学から学生が集まり、それぞれが興味のある分野で活動している。詳細はホームページ参照。http : //www.iie.hiroshima-u.ac.jp/index.html

4　この国際交流キャンプは、国立江田島青年の家が主催し、広島大学留学生センターの共催で行われた。外国人や日本人が互いの交流を通し、単に世界の国々に関する知識を

増やすのではなく、異文化を認め尊重し合う異文化コミュニケーション能力を身につけることを趣旨とした。

5　広島大学の外国人留学生数は平成16年５月１日時点で、768人である。出身国は62カ国にものぼる。

6　現在、「短期交換留学プログラム留学生のための英語で行う授業の日本人学生への開講ニーズ調査」を進めているが、調査の過程で広島大学の日本人学生が、留学生センターの存在・活動などをあまり知らないことなどが分かった。

7　P.41-42参照。

8　留学生の出身地域別に上記三領域の相関係数を見た場合、学位の取得や技術習得をめざすことを目標にする傾向の強いアジア地域の学生では、「学校での勉学内容」をより重要な判断基準としている（荻原　1991：39）。

9　Institute of International Education（IIE）（2003）によると、2003—2004年度にアメリカ留学した学生の数は、586，000以上とされている。海外留学したアメリカ人学生の数は、2001—2002年度で160，000人を弱冠超える程度である。

10　Julie Spencer-Rodgers Timothy McGovern（2002：611）は、Dodd, 1995; Giles&Robinson, 1990; Wiseman&Koester,1993）を参照。

11　ソーシャル・スキルとは、「対人関係における具体的技能であり、この訓練は社会生活能力を向上させるものである」（田中：1991：98）。

12　山本らはFurnham（1982）らが英国内の留学生の社会的困難を調査した際に用いた社会状況質問紙（Social Situation Questionnaire）から、留学生に関する二十一項目を選択している。

13　Julie Spencer-Rodgers・Timothy McGovernはGudykunst&Hammer, 1988; Neuliep&McCroskey, 1997; Stephan&Stephan, 1985; Yook&Albert,1999を参照。

14　Julie Spencer-Rodgers・Timothy McGovern（2002：611）はKim, 1986; Gudykunst&Hammer, 1988; Giles&Robinson, 1990; Gudykunst, 1986; Wiseman & Koester, 1993を参照。

15　現在、広島大学短期交換留学プログラムで留学生向けに英語で開講している授業を、日本人学生も受講できるようにすべきかを検討していきたいと考えている。そのため、2005年度２月、日本人学生にそのニーズがどれだけあるかアンケート調査を行った。調査結果に基づく論文は、2006年度発行の「広島大学留学生センター紀要」または「広島大学留学生教育」に投稿予定である。

16　私の観察した限りでは、アメリカ・オーストラリアの大学のinternational students officeと比較した場合、日本の大学の留学生関係の事務局、留学生担当教員は、留学生の勉学面、生活面全般に渡り、かなり詳細な部分について世話をしているように思える。アメリカ・オーストラリアのinternational officeの場合、あくまで大学での授業受講な

どがスムーズに規定どおりに進められるよう案内をし、勉学を支援することを基本としている。宿舎関係やカウンセリングなどのサービスは別の機関として整備されている。あくまでサポートは定められた時間帯のみである。それに対し、日本の大学の場合、留学生の生活全般に渡って留学生関係の事務局・留学生担当教員がかなり世話をしており、留学生が“顧客”的に扱われている感がある。アメリカ・オーストラリアの場合、大学が関与せず、個人の問題として解決することが予測される事項も、日本の場合‘大学に属する’学生の問題として大学が問題解決にあたる場合も多く、公と私の区別がつきにくくなっている部分もあることを懸念する。

17　戦後の日本研究で「日本人論」が盛んに論議され、日本人・日本社会の独自の特徴などが取り上げられたが、杉本良夫、ロス・マオアが日本人論を批判的に論じ、多くの研究を行ってきた。日本人・日本社会に何らかの特徴があることは否定できないが、留学生の体験を、即日本人論にあてはめて論議することには注意が必要であると考える。杉本良夫、ロス・マオアの研究については、「日本人論の方程式」、*Constructs for understanding Japan*、*Images of Japanese Society : A Study in the Social Construction of Reality* などを参照。

引用文献

Dodd, C. H. (1995). *Dynamics of Intercultural Communication* (4th ed.). Madison: Brown&Benchmark.

Furnham, A. and Bochner, S. (1982). “Social Difficulty in a Foreign Culture: An Empirical Analysis ofCculture Shock,” in Bochner, S., ed., *Culture in Contact, Oxford: Pergamon Press*.

Giles, H., & Robinson, W. P. (Eds.). (1990). *Handbook of Language and Social Psychology*. Chichester, England: Wiley.

Gudykunst, W. B., & Hammer, M. R. (1988). “Strangers and Hosts: An Uncertainty Reduction Based Theory of Intercultural Adaptation.” In Y. Y. Kim, & W. B. Gudykunst (Eds.), *Cross-cultural Adaptation: Current Approaches*, pp. 106–139. Newbury Park: Sage.

Gudykunst, W. B. (Ed.). (1986). *Intergroup Communication*. Baltimore: E. Arnold.

Kim, Y. Y. (Ed.). (1986). *Interethnic Communication: Current Research*. Newbury Park: Sage.

Mary Hinchcliff-Pelias and Norman Greer. “The Importance of Intercultural Communication in International Education,” *International Education*, Vol. 33, No.(Spring 2004): 5–18.

Mouer, Ross and Yoshio Sugimoto (1989). *Constructs of Japanese Society*. London, New

York: K. Paul International: New York, NY, USA: Distributed by Routledge, Chapman, and Hall.

_____(1986). *Images of Japanese Society*: A Study in the Social Construction of Reality. London: KPI.

Neuliep, J. W., & McCroskey, J. C. (1997). "The Development of Intercultural and Interethnic Communication Apprehension Scales", *Communication Research Reports* Vol. 14 : 145–156.

Spencer-Rodgers, Julie and Timothy McGovern. (2002). "Attitudes toward the Culturally Different: The Role of Intercultural Communication Barriers, Affective Responses, Consensual Stereotypes, and Perceived Threat," *International Journal of Intercultural Relations*, Vol.26: 609–631.

Stephan, W. G., & Stephan, C. W. (1985). "Intergroup Anxiety", *Journal of Social Issues* Vol. 41: 157–176.

Wiseman, R. L., & Koester, J. (Eds.). (1993). *Intercultural Communication Competence*. Newbury Park: Sage.

Yook, L. E., & Albert, R. D. (1999) "Perceptions of International Teaching Assistants : The Interrelatedness of Intercultural Training, Cognition, and Emotion", *Communication Education* Vol. 48: 1–17.

江淵一公（1991）「在日留学生と異文化教育—研究の視覚と課題」『異文化間教育』No. 5 pp. 4 –20

荻原　滋（1991）「日本留学に対する在日および帰国留学生の評価—1975年および1985年の調査結果から」『異文化間教育』No. 5　pp.35–48

荻原滋・岩男寿美子（1988a）「在日留学生の滞日イメージ」『慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要』No.48　pp.88–89

荻原滋・岩男寿美子（1988b）「日本で学ぶ留学生—社会心理学的分析」けいそう書房

木村敏（1972）「人と人との間」弘文堂

倉地暁美（1991）「異文化間コミュニケーション能力開発のために—ジャーナル・アプローチの創出とその意味」『異文化間教育』No. 5　pp.66–80

杉本良夫・ロス・マオア（1995）「日本人論の方程式」ちくま学芸文庫

田中共子（1991）「在日留学生の文化的適応とソーシャル・スキル」『異文化間教育』No. 5 pp.98–110

坪井健（1999）「留学生と日本人学生の交流教育—オーストラリアとの比較を通して」『異文化間教育』No.13　pp.60–74

浜口恵俊（1982）「間人主義の社会　日本」東洋経済新報社

山本多喜司（研究代表者）（1986）「異文化環境への適応に関する環境心理学的研究」昭和60年度科学研究費補助金（一般研究B）研究報告書
横田雅弘（1991）「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』No. 5 pp. 81-97